

みっしょん通信

2022年5月発行 No.4

横浜教区宣教委員会ニュースレター「みっしょん通信」第4号をお届けいたします。今回は『祈りのしおり ～家庭での信仰生活のために～』特集です。この2年余り、宣教委員会が力を入れてきた『祈りのしおり』がいよいよ発行されることになりました。宣教主事としてのメッセージと、宣教委員お二人からの思いを掲載しています。ぜひお手にとりいただき、ご一読ください。

宣教主事

『祈りのしおり ～家庭での信仰生活のために～』発行の経緯について

宣教主事 司祭 サムエル 北澤 洋(鎌倉聖ミカエル教会牧師)

| 年齢 | 受洗者数 | 堅信受領者数 | 堅信受領者割合 | 現在堅信受領者数 | 現在堅信受領者割合 |
|--------|-------|--------|---------|----------|-----------|
| 年齢不詳者 | 1 | 1 | 100.0% | 1 | 100.0% |
| 101～ | 0 | 0 | 0.0% | 0 | 0.0% |
| 90～100 | 4 | 3 | 75.0% | 3 | 75.0% |
| 80～90 | 26 | 18 | 69.2% | 9 | 34.6% |
| 70～80 | 58 | 50 | 86.2% | 29 | 50.0% |
| 60～70 | 120 | 117 | 97.5% | 88 | 73.3% |
| 50～60 | 157 | 148 | 94.3% | 88 | 56.1% |
| 40～50 | 281 | 266 | 94.7% | 150 | 53.4% |
| 30～40 | 556 | 522 | 93.9% | 254 | 45.7% |
| 20～30 | 1,384 | 1,280 | 92.5% | 538 | 38.9% |
| 10～20 | 1,330 | 1,188 | 89.3% | 465 | 35.0% |
| 0～10 | 3,247 | 1,944 | 59.9% | 1,002 | 30.9% |
| 合計 | 7,164 | 5,537 | 77.3% | 2,627 | 36.7% |

受洗時年齢に基づく信徒の減少(「洗礼堅信受領年齢データ」による「教区全体の信徒分析 2019」から)

2019年、全教会・伝道所を対象に行われた調査をもとにして「洗礼堅信受領年齢データ」が作成されました。このデータの分析が、協働主事会、教務所職員、宣教委員会によって行われました。データからさまざまな事実が明らかとなりましたが、そのうちの 하나가、10歳までに洗礼を受けた信徒(幼児洗礼受領者含む)の堅信受領率の低さです。

上の表をご覧ください。これは、「洗礼堅信受領年齢データ」によって作成された表で、受洗時の年齢に基づく受洗者数と堅信受領者数、受洗者数に占める堅信受領者数の割合、現在堅信受領者数、受洗者数に占める現在堅信受領者数の割合を示したものです。「0～10」の年齢を見ますと、受洗者数3,247人のうち、堅信受領者数が1,944人で、割合でいうと約60%です。つまり、残りの約40%の人が、幼い頃洗礼を受けたにもかかわらず、堅信の恵みに与かることなく今に至っているのです。この堅信受領率の低さは、他の年代と比べて突出しています。

このことは何を意味しているのでしょうか。それは、親から子、子から孫への信仰の継承が十分になされていないという状況です。そのような状況が、現在の横浜教区にあるということです。

このことに、私たち宣教委員会は大きな危機感を持ちました。「信仰の継承」という、私たち信仰者にとってとても重要で、しかし難しい課題に対して、私たちはどう対応すればよいのか。

そこで考え出されたのが、家庭という場で信仰を育てていただくための祈りの冊子の作成でした。宣教委員会は、『祈りのしおり』の中の「はじめに——この冊子について」にこう記しました。「わたしたちの信仰は、どこで育まれるのでしょうか。どこでその成長のための霊的な糧を得るのでしょうか。主日ごとに礼拝が献げられる教会において、というのが一つの答えでしょう。一方で、人の信仰の成長のために、教会と同じくらいに欠かすことができない場所があります。それは、生涯において長い時間を過ごすことになる『家庭』という場所です。／『朝の祈り』、『夕の祈り』、『就寝前の祈り』、『食前感謝の祈り』、『日々の恵みへの感謝』——お父さんやお母さん、お祖父さんやお祖母さんが、日々家庭の中で祈りを献げる姿を子どもたちに見せ、子どもたちもともに祈ることを繰り返す中で、わたしたちは神様との交わりを深め、信仰を少しずつ成長させていくのです」。

「信仰の継承」という課題に対して、何か奇をてらった策を講じても仕方ありません。正攻法でいくしかありません。家庭での祈りをより豊かに、より深くさげさせていただくこと。そのことで、神様とより豊かに、より深く交わっていただくこと。これしかないだろう、というのが宣教委員会の出した結論でした。

『祈りのしおり』には家庭生活のさまざまな場面で祈ることができる61の祈りが収められていますが、その中にはオリジナルの祈りが11入っています。他は現行祈祷書や祈祷書別冊諸式などからの引用です(ただし、家庭という場で祈ることができるように若干手を加えています)。オリジナルの祈りは、他の書物にはなく、しかしこの『祈りのしおり』にぜひ入れたい祈りを宣教委員会が独自に作り、収めたものです。この中には、「信仰の継承」という課題から必然的に導き出された祈りがあります。「洗礼の恵みを求める祈り」、「堅信の恵みを求める祈り」がそうですし、また、題名に「——幼子とともに」と付けられた祈りもこれに該当します。「——幼子とともに」と付けられた祈りは、ご両親やお祖父さんお祖母さんと幼子と一緒に祈ることができるように、全文ひらがなで掲載されています。

この『祈りのしおり』を多くのご家庭で使っていただきたいと、心から願っています。ふだん教会に通っておられる方々はもちろんですが、特に、ふだんあまり教会に通っておられない方々、教会から長い間離れておられる方々、そういう方々にこそ、この『祈りのしおり』が届いてほしい、と思っています。なぜなら、そういう方々こそ、「信仰の継承」が最も難しい方々だからです。

『祈りのしおり』が、一人でも多くの方の手に届き、それぞれのご家庭で用いられ、神様とのより豊かで、より深い交わりをもたらすものとなりますように。そして、そこでさげられる祈りが、各人の信仰を育み、信仰を次の世代へと繋いでいくことができますように。



祈る心を忘れないために

司祭 サムエル 小林祐二(宣教委員・清里聖アンデレ教会牧師)

私が 2020 年に宣教委員の任を仰せつかる以前より、協働主事会では入江主教さまの主導により教区教勢についての細かな現状分析が行われました。壮年で受洗された方は堅信受領に至る率が高い一方、幼年で受洗された方は堅信受領に至る率が低いという傾向が見られ、若年の受洗者を堅信に導く方策が検討されてきました。私も日々の働きのなかで「聖職と信徒、殊に教父母は、洗礼を受けた幼子を教会の交わりに参加させ、その成長に伴って、聖書の教えを聞かせ、教会問答によって、使徒信経、主の祈り、十戒をわきまえさせ、堅信式を受けるように導かなければならない」(祈禱書 p.267)との言葉を再確認しながら歩むようになりました。教区としても教父母研修会をはじめとした研修会が充実してきたように思います。そのような機運の中、宣教委員会で議論が重ねられ、日常的、また子どもたちと一緒に用いることのできる祈りの冊子を準備することとなりました。

祈禱書、聖書、聖歌集のことをまとめて“礼拝用書”と呼ぶことがあります。祈禱書の朝夕の祈りや諸祈禱等は特に日常的に自宅等で用いていただきたいと思いますが、他方「聖なる公会の公禱、聖奠【 sacrament 】および諸式を載せたもの」(祈禱書目次前)という側面があり、その意味ではたしかに“礼拝用書”です。しかし教会によって見受けられる「マイ祈禱書置き場」に置き去られる礼拝用書、また聖餐式以外のページが真っ新な祈禱書を見るにつけ、どこか寂しい気持ちになってしまいます。持ち運びが大変という方、厚くて難しいと思ってしまう子どもたちのお気持ちもわかりますが、礼拝用書と一緒に祈る心まで教会に置いていかないでいただきたいな…と思うのです。宣教という言葉はなかなか掴み所が難しい面がありますが、主日以外の 6 日間の過ごし方が大きく関わっていることは疑いようのないところでしょう。



何か予備的なものを思い描いていたところ、期せずして宣教委員の働きを通じ『祈りのしおり』を具現化する機会が与えられ、編集作業を受け持つことになりました。校正、書体・段落設定、ルビふり、ページ割、見出しと目次の連携、ファイル出力…。この作業を何度も繰り返すには忍耐も必要でしたが、宣教委員皆で心を込めて目を凝らし、入江主教さまにもご推薦とご確認をいただき、子どもたちが節目を迎える年度末、いよいよ原稿を印刷業者へ。初版 1000 部という部数は決して小さな規模ではなく、確認に確認を重ね、最後の送信ボタンのクリックはととても勇気のいるものでした。

出来上がりを見届けるまで落ち着けないところではありますが、皆さんがよく用いてくださり、生活のなかでの祈りがますます深められますよう願ってやみません。

表紙は官製ハガキ程度の厚めのコート紙を用い、丈夫な冊子になっていることと思います。祈りがページをまたがないよう余白を多めに取り、巻頭巻末には書き込みできるページを設け、使いやすさにも配慮しました。祈禱書よりも少し大きな文字サイズですので、様々な方に読みやすいものとなって

いることと思います。

信徒の皆様のみならず求道者の方へ、また幼稚園・保育園・高齢者施設等でもご紹介いただければ幸いです。どうぞよろしく願いいたします。

『祈りのしおり』発行にあたっての願い

クララ 村瀬良子(宣教委員・松戸聖パウロ教会信徒)

私が宣教委員として関わらせていただいた『祈りのしおり』が発行される運びとなりました。今回の「みっしょん通信」に「宣教委員としての願い」を載せることになり、「宣教委員会の願いは何だったのだろうか」と考えながら今までのことを振り返ってみました。

私が関わらせていただいたのは宮崎司祭様が宣教主事のときからです。そのときは「信仰生活をともに歩みましょう。」と題したポスターを制作し各教会に配布いたしました。「聖餐を中心に、教会でも家庭でも喜びのうちに信仰生活を歩みましょう」という願いを込めたポスターです。



次に松田司祭様が宣教主事のときは、33教会と伝道所(2017年当時)の写真とみことばが掲載された「みことばカレンダー」を制作して販売いたしました。これは、「横浜教区が一つとなり、家庭においてもその日掲載されている教会のために祈り、みことばを味わってほしい」という願いから作られました。

「宣教委員会とはいったい何をすればいいのだろうか。」いつも頭に浮かぶ疑問です。

今回振り返りながら考えたことは、「信仰生活というのは、教会にいる時間よりも教会の外の時間のほうが多いのだ」という当たり前のことでした。その「教会の外の信仰生活をお手伝いできたら」というのが、「宣教委員会の願い」だったのではないかと思います。

私自身、教会の外の信仰生活は恥ずかしいものです。子育てに追われ、子どもがやっと育ったかと思ったら仕事に追われ、みことばに触れることから祈ることからも遠い毎日を過ごしてきました。「祈りが家庭の中に自然にある」とはいきませんでした。

今までのことを振り返る中で、みことばが、祈りが、生活の中に自然にあることがとても大切なのではないかわざされました。そうあることが「宣教に繋がる」のではないかと思います。

今回『祈りのしおり』によって、「祈りがある信仰生活」のお手伝いができたら宣教委員の一人として嬉しく思います。

私も今からでも遅くはない、みなさまと一緒に「祈りと共にある信仰生活」を送りたいと思います。

忙しいときは食前の感謝の祈りだけでもいいし、就寝前の祈りだけでもいい。病気になったときや苦しいときには「神さま、助けてください。」と祈る。一人で祈るときも、家族と一緒に祈るときも身近にこの『祈りのしおり』を置いていただければ幸いです。

自分のことだけではなく家族のために祈るとき、またほかの方々のための祈るとき、発行された『祈りのしおり』が役に立ちますようお祈りしています。